TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

The Epitome of James Joyce’ s Finnegans Wake I, 3 (2) (64.30˜74.19)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大島, 由紀夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/2086

Journal of the Tokyo University of Marine Science and Technology, Vol. 17, pp. 57-64, 2021

［資料］

ジェイムズ・ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』第１部第３章の概要（２）(64.30～74.19)

大島由紀夫*1

（Accepted November 26, 2020）

The Epitome of James Joyce's *Finnegans Wake* I, 3 (2) (64.30~74.19)

Yukio OSHIMA*1

Abstract: I translated into Japanese the latter part of James Joyce's *Finnegans Wake* I.3 (64.30～74.19). In some parts I translated it word for word, but in other parts I just gave the gist of the sentences or the paragraphs. So in naming the title I used the word 'epitome,' not 'translation.' The part I translated in this journal treats the episode of a sugar-daddy, the letter which ALP wrote to HCE, HCE's trial and acquittal, the two girls who tempt HCE, ALP's seductive behavior toward HCE, and HCE's being abused by an eccentric.

Key words: *Finnegans Wake,* Part I.3, epitome

サア、サア、その巨大容量の大きな高貴な頭をもった一般人であり、その汚れのない、飾らぬ表情をしたマシンスキー・スカポロポロさん、ダズンアスキューさん、また他の皆さん、あなた方の屠殺人が処理した子羊の肉の足は、あまりに引っ張られたが故に筋が硬くなっています。雷鳥が鶏だった頃、ノア・ビアリー【同名の父子ともにアメリカの俳優】は 1001 ストーンの体重がありました。今や彼女の脂肪は急速に落ちています。それゆえ、おしゃべりな皆さん、あなたたちも脂肪を減らしたらいかがでしょうか。花の咲く時が一番適した時であるということには 29 の好ましい理由があります。(65)傷んだ石のような根ショウガで生かされていても、お年寄りはピスタチオナッツを夢中になって食べるのです。ベルトの回りが秋となるかのように、頭も冬になりますのに。もし頭にヘアピンをつけているのなら、そんなに禿げているようには見えないでしょう。頭に「ぴったりとくっついた髪の毛氏」を持つことになるでしょう。サテ、いいですか、流し目氏さん！　そのつまらぬものをお仕舞い下さい。これからずっと！　若い女の元を訪れる変人の話をしよう。彼のつややかな髪の毛に注目せよ。非常に優美な髪だ。活人画だ。彼は彼女に、必ずやお前を自分だけの愛人にすると誓い、一緒になって、ししし親密につきあい、西の離れたところの、幸せが保証された愛の住処で、ともに楽しくやっていくことを誓う。そしてこの愛の巣の中で、５月の夜、お前は輝き、俺たちは櫛でコメット・テール【髪】を整え、子供用の銃を星々に向かって撃ち、一晩中キキキキラキラ光るのだ、と彼は言う。食事には常にシュークリームが！　すべてが素敵に、ミス・マッケンジーのように【アンソニー・トロロープの小説『ミス・マッケンジー』の中の主人公】。この愛すべきおじいちゃんについて言えば、彼は星々を見、それに熱狂し、それに燃え盛って、ずっと浮かれまくるのだ。さもあろう！　彼女の方は折り返しこの上記の人物から現金をもらいたかったし、それとともに、衣装ダンスも送ってもらいたがっている。そうすればピーター・ロビンソ

*1 Professor Emeritus of Tokyo University of Marine Science and Technology (TUMSAT), 2-1-6 Etchujima, Koto-ku, Tokyo 135-8533, Japan（東京海洋大学名誉教授）

ン【イギリスのデパート】で売っている嫁入り道具を買えるようになり、またアーティーやバートの目を、そしておそらくチャーリー・チャンス（知っている奴などいない）の目をも引くことが出来るようになれるのだ。だから頭のいかれたハンター氏よ、あなたを私のダンスの相手にすることが出来ないくらいに、あなたはいかれているのだ（だから彼女は離れていくのだ！）。そしてこのようにして街の娘の半分が、おじいちゃんである彼がズボンにズボン吊りを掛けようとしている間に、下半身用の下着を手に入れたのだ。しかし老人である彼の頭は、愛人といちゃつき行為との間で、それほどいかれていた訳ではない（君が生まれてからずっとそんなことはないよ、君！　あのズボンをはいてもそういうことはなかったし！　大きなジョッキで酒を飲んでもそういうことはなかった！）。というのも、どこか噂が立っていない場所に、こっそりと彼は第２の女をもっているからだ（やったぜ、我らのおじいちゃん！）。そしてこの女をも時間の一部を使ってかわいがってやりたいと思っているのだ。なぜなら彼は第１の女が心から好きなのだが、何ということか、第２の女にもかなり夢中だからなのだ。それゆえ、もし彼がこの２人を追いかけ回し、かわいがることさえ出来たなら、３人皆、真に幸せな気分になるだろう。それは ABC を学ぶのと同じくらい簡単なことだ。つまり、２人の人付き合いの良いお嬢さんたちと、彼女たちのケルビムのような男のことだ（というのも、彼は恥ずかしいくらいにのめり込んでいるのだ）。彼らが皆、彼の気配りの下、２人ずつ抱き合いながら夢のような人生のボートに乗って浮かんでいたら、きっとそのような気分でいられるだろう。あなたにとっての紳士と、私にとってのかわい子ちゃんと、お父さんを夢中にさせる子とが、彼の心が落ち着かないまま、徹底的に狂おしく、最高にいちゃついたら。あなたには出来ますか。おしまい。

以上です、おしまい、終わりです。これでもって、パチパチ、パチパチ【拍手】、突然ですが終止符を打ちましょう。我らの共通の友人である、門のところに置いてある炉格子と酒瓶も、何となく彼らと同じ運命を共有しているようです。言うならば、この２つもまた、(66)同じ在り方の特徴をいくつか持っているのです。というのも、実際その種の詮索的なことを言っても詮無いことであり、明けても暮れても１日に１回か２回、隔日の夜に、あらゆる年齢のあらゆる男女の様々な人々の中で、個人の家でも、公事においても、国内でも、世界のどこでも、至るところで永続的にこうしたことは生じるからであり、そうしたことすべての量は特に膨大になっているからです。こうしたことは今後も続きます。勝利感に満ちたエクスタシーの喜びに向かう、連邦連合運輸協会提供。

しかし問いを再開しよう。その日の翌朝、次のようなことになるとは、一体郵政の労働組合員（公式には、スコットランド郵便株式会社の郵便配達員）にとって、奇妙な運命ということになるのだろうか（すなわち、ウェルキングトリクス【シーザーに立ち向かったガリア人の首領】である彼は、若い女たちの手紙に貼られた、裏側がネバネバしたもの【切手】を売って歩く狼藉者と呼ばれている）。つまり、純粋の白からラベンダー色までの様々な７色のインクが使われ、この洗濯女について、あらゆる S 字形、あらゆる曲がりくねった下手くそな文字で書かれ、宛名として、WC. ダブリン、ハイド・チーク・エデンベリー【HCE】宛て、と記され、上部に、敬具、「滑稽なる者より」と鉛筆書きで署名がなされ、追伸として、聖アントニーの導きの元で、とある連鎖封筒【連鎖の手紙は日本の「不幸の手紙」のようなもの】を配達することである。ハンガリー語【のように意味不明な言葉】が入り込み、愚劣な言葉遣いで書かれたものは何であれ、黒が白と見えるような、白が黒を押さえつけているような、スターンやスウィフトやジョリー・ロジャー【元来は海賊旗】が使う、シャム姉妹の様に相異なるものが重なり合っているもののように、常に思われるのであろうか。そのように書かれたものは、夜であっても我々の上で煌めくのだろうか。そして我々はその光の中に飛び込んでいくのであろうか。ソウ、今やそうした奇跡が起こるかもしれない。ソウ、それは光を放つのだ。常に、ずっと。雄鶏の妻が、雄鶏夫人が、彼女を追い求めたオーウェン・K【オーウェンキースは川の名】の件について、その後どうなったのか知ろうと２度くちばしを挟むまでは。こうしたゴミの欠片に満ちた手紙袋は、ヘルメス柱像の異父母兄弟である郵便ポストの腹の中に密かに横たわって眠っているのであろうか。当然のことながら初めて見た時には琴と間違えられる（彼ら３人がちょうど生まれた時に、ユバルをヤバルと、また彼ら２人をドバルカインと区別することは難しいことである）、幻想を重んじる芸術家の傑作であるその棺が、万事の自然の成り行きとして必要とされるあらゆる種類の葬式の必需品を提供し続けている、死者のための有名な館である「オエッツマン・アンド・ネヴュー社」【「オエッツマン・アンド・カンパニーは家具商名」】の、機械設備の整った敷地からなくなってしまった。それにしても、何故それは必要とされたのか。実際必要とされたのだ（金を持っていなければ、あなた方

は空虚な気分を覚えないだろうか)。というのも、雪婚荘で開かれる、豪華な服に満ちた舞踏会にいる、一種の戯れとしての百合模様のボレロを着た、きらびやかな１人のあるいは複数の花嫁や、(67)常にあなた方では相手にならない、直立した花婿たちが(全く彼らがそうする時には！)、真夜中に、そこにケーキをおき、裸で、時計が時を打っても無我の境地に入っている時に、我々が住むこの世のこの棺以外の何が、この２人のロマンを拒絶し、彼らをまっすぐ尻の穴や骨灰が存在する現実世界へと連れ戻すのであろうか。

話を進めよう。空気から解放して酸素という栄養素を残すことが、我々には可能であろう。水が作用している気体の袋、あの化合物を分解せよ。そして得られた明るい場面を生み出すものを、この部屋の大気にもう少し送り込むようにせよ。ヘリウムが鬱積したままのケース【法廷】の中で、臨時警官であり、素晴らしいメダルをこれみよがしに胸につけ、その上、道の角にある、煉瓦とブリキでできた教会の聖書の読み手【プロテスタント】である、のっぽのラリー・トブキッズは、証言台においてノルウェーの仕立て屋のように、正規の役人の前で次のように宣誓して言った。即ち、自分は屠殺人のエプロンのような青の服を着た、まさに奇妙な男と出くわしたのだ、と。そして続けて言うには、この男は最近ある日の夕方に、「リムリックのオットー・サンズ氏とイーストマン氏食料品店」の配達人として、羊の臓物の肉片と肉汁を配達した後、ひどく驚いたことに、歩いていって、すべての規則に違反して、居酒屋のドアを蹴ったのだ、と。そして皆から田舎者と思われているその人物（彼の場合あちこちで追い出されていた）について、その罪を着せられた横柄なる者の側【HCE 側】から、そいつは何者だったかと厳粛に尋ねられたので、単にこう答えた。ちち誓って言うが、以前声を大にして言ったように、フィリップ署長だった。あんたがああしたんだよ、と。オイ、あなた大変な間違いを犯してるよ。マダム・トムキンスさんよ、あなたに一言言わせてくれ、と、淑女が行うようなサラームを行いながら、マックパートランド（あの屠殺業者一族、ニックネーム以外は世界最古の一族の１人）は【トブキッズの証言に】応じた。フィリップは【その時】部下の警官とはしゃいでいたんだよ。でもうかぬ顔をしていたけれどもね。

さてこれまでの事柄と相対する事柄を見ていこう。ベルベティーン【綿ビロード】を着た女からディミティ【畝織り綿布】を着た女までは、かろうじて指５本分の隔たりしかなく、それゆえ 駱駝の背をもった人物の行き過ぎた行動は、あらゆることの引金となる因子、つまり、彼女たちが甘いマルゲリータであれ、酸っぱいポスカであれ、その向こう見ずな、不誠実な、シャツ姿のヒロインたちのどちらか、あるいは両方が原因となって引き起こされたと考えられている。アア！　アア！というのも、今日次のように言わなければならないのも辛いことであるが、２人のうちの１人デリダたるルピタ・ロレッテ【loretta はフランス語の俗語で娼婦の意味】は、ずっと穏やかな人生がこれから控えているというのに、不意に発作を起こして石炭酸を飲み、衣服を脱いでいったからだ。また他方彼女の愛する義理の妹の汚れた鳩【高級売春婦の意味】のルペルカ・ラトゥーシュは、(68)ある日雑用をさぼっている時に、両目をもっている男のためにストリップショーをやっている間、自分の両足が互いに会うと嬉しがることに思い至り、またこの手に負えない娘は、すぐさま価値ある帽子が自分にとって小さすぎることに気づいて、急いで時計を見、干し草の積み重ねの上で、あるいはがらくたの物置の中で、あるいは間に合わせの緑の芝草の上で（我々がただ想像にまかせる他ない女性の愛の物語すべてには、互いに何らかの親密なつながりがある)、あるいはきれいな教会構内の中庭においてさえ、一寸した有煙炭【宝石】や数多くの薄いトランクを得るために、すぐさま手持ち無沙汰な【体の】魅力を愛撫し、手放し、売ることにしたのだ。こうした結果、男たちにあの熱い錐体部【女陰】を**ジプシー風に**提供したのである。そしてその錐体部は我らの唐辛子のように赤い頬をした愛らしいお婆さん【ALP】が、マックールの息子であるオスカーのお爺さん【HCE】に贈ったのと同じものであった。そしてエメラルドの海岸のあだっぽい美女、驚くべき淫らなキスをする女、服従を受ける者に服従を命じる女、自分を服従させる者に服従する女、この女【ALP】は、ディアマッド【12 世紀のレンスターの王】の真の娘であり、何人もの哀れな若者を破滅に追いやった程の放埒なワルキューレなのだが、レンスターに夕べが来た時（彼女の持ち物はフォーティー・ステップス【クロムウェルの指令本部】で、彼【HCE】のいつもいる場所はクロムウェルの指令本部だ)、再度、そして再度、ソウ、そしてまた再度彼に挑まなかったであろうか。あんたを私のものにしてみせるわ、エッ、あんたを私のものにしてみせるのよ、エッ、エッ、あんたを私のものにしてみせるんだから、あんたを倒してみせる、やめろ、いいか、お前、犬のように不信心な女め！　面白いことになりそうね！　曾祖父の祖父であるストロングボウ【ペンブローク伯爵リチャード・ドクレア、アングロ・ノルマンのアイルランド侵略のリ

ーダー】のように、あけすけな、卑しい、偽りの、腰抜けの、ガツガツとした、病んだ愚か者が出す不遜な大声を出して、彼は彼女の振舞いに、誤った烙印を押さなかっただろうか。悪魔の糞！　妖精の女王、もぐり酒場のあばずれ、悪ふざけの妃というように。王者らしい風格を持ち、王に似つかわしい身なりをした王たる王、そうした彼の栄光を高めたまえ！　王らしく与えたし、王らしく受けとっていた。今はそうではない、今は違うのだ！　彼は単なる人に過ぎないであろう。苦しむ自画自賛者なのだ。彼は自分が欲していると思った。何を？　聞け、アア、聞け、この地に住む者たちよ！　飢餓と死の時代にいる者たちよ、耳を傾けよ！　彼はここで彼女のさざ波のたつ小川に欲望の目を向けているのだ。彼は過ぎた日々の彼女の声を聞く。彼は聞く！　ネエ、どうなの、言って！　しかし彼の預言者のようなあご髭に賭けて、彼はそれに答えることが出来ない。起床するまでずっと！　【彼の】言葉を刻む碑を即座に建てるためのフェニキア産や小アジア産の柱体も石柱も必要ない。いかに脅迫じみた言葉がどんなに悔いている者の心を痛めつけるかを表すための岩も石も必要ないし、またトマールの森林【クロンターフの戦場】にも、それを建てるための窪地は必要ない。しゃべらない口は思考を伴わない舌を引きつけるものだ。それほど長い時間でなくとも、みだらな声が彼らの耳を引きつける限り、地球が破滅するまで、目の見えない者が口の利けない者を導くことになろう。小さき者たちよ、本当のことだ！　ランプの石柱は、我々の背後に、道標となる葉の痕跡を残すのだ【ジプシーは自分たちの通った道を後ろにいる者たちへ示すために、一定量の葉や草を置いておいた】。(69)仮に直接的であれ、代理の男を介してであれ、生命や身体や財産に危害を及ぼす暴力が、しばしば彼が怒らせた女のとる表現方法であったとしても、妖精が存在していて、荒れた地上に花が咲くことを望んでいた時代以来、ささやかれている罪についての噂話が個々の人々の心に植え付けられた後も、脅迫して取り立てることが起こらなかっただろうか。

さて、記憶力を働かせて、壁の穴についての話に舵を戻すことにしよう。巨人ブライアント【サー・ブリョント（Sir Blyaunte）はアーサー王物語の登場人物で、ランスロットの救助者】が巨大な鉛筆【ウェリントン記念碑】と対峙しているところには、かつて壁があった。高い壁であった。そして非常に大きな壁の穴【HCE の居酒屋への入り口。HCE と社会とのつながりを表す】が存在していた。アイルランドに鉱石や人々の怒りが存在するより前のことであった。教父たちの後継者であるあなた、あるいはモーセ夫人であるあなた、あるいはエデンの園や、すべてのアダムがイヴとともに最後を迎えた楽園の喪失について歪曲して語る、あなた方の数多くの男子、女子が存在するより前のことであった。彼らはアルメニア人なのだろうか？　その館は彼らのものなのだが、しかしたとえ彼【HCE】がマッチを擦ったとしても、その館は私にとってはまだ目に見えないものである。しかしながら、ほんのちょっと黙してさえいたなら、我々はすぐに、見た目に露な靴の光沢【事実】にお目にかかるであろう。卵はまさに立派なガチョウとならせておけばよい。イシュタル【アッシリア、バビロニアの豊穣、戦争の女神】たるエスターには、星となったエスター【スウィフトの恋人ステラ及びヴァネッサは２人とも名前はエスター】を演じさせておけばよい。苦痛にかき乱された地域の、夢のドラマの中での話だ。病が蔓延っている地域の。この超楽天家が残りの人生において、年をとっても幸せな暮らしを送れるようにと（そうした暮らしを暖かく迎えよ、そして彼にキスをせよ）、生後１年の羊（極上の）を６ペンスという、また生後１年の山羊（見習いクラスの）を８ペンスという適正な料金で貸し出し、そしてその金でこの小屋を買い拡張している間、ストーンヘンジのような門は、この時別のことのために使われていた。そしてあらゆることが当の目的のために準備された時、愚かな者たちを寄せつけないために、門の代わりにベッドの架台を置く者（この時までに突起物から垂れ下がっている大きな汚れが、このことを明確に表す）とは異なり、彼はこの場所にリンゴの木で出来た【前述の門とは別の】門を設置した。そしてまさにその頃、山猫が山羊に手出しをしないようにと、昔から一般に広まっていた習慣によって、彼が忠実に尽くしている市民たちは、彼に対しあの【ストーンヘンジのような】鉄の門に、意図的に３重の鍵をかけたのだ。おそらくそれは、中に彼を閉じ込めておくためであろうし、そしてまた未だ土の中に素直に埋もれていることに慣れていないが故に、彼が人々の卵の日【イースター】に胸を張りすぎるくらいに張りながら散歩して、恵みあふれる神意に挑もうとすることが出来ないようにするためのおそらく処置であったろう。

アア、ついでながら、無駄話をすることを誇りに思うことにしよう。そして過去に起ったことと関連して、次の話を常に覚えておくべきである。すなわち、ベトレフェンダー氏という、北向きの部屋に住む者がいた。彼は夏の休日のための下宿部屋を探し求め、ラックスリップ（そこではソックアイ・サーモン【紅鮭の意味】が、当時オレン

ジだけをとる断食をやめていた）にある「大樽１杯のラム酒」亭（ダーティー・ディックが営む独立居酒屋【特定の醸造所と提携していない個人所有の居酒屋】の支店）の 32 号室を間借りした。(70) それ以前彼は、ヨーロッパ合衆国の中のオーストリア出身のセールスマンであった（何と、彼は彫刻の主要な道具である【彫刻用地金を拭くための】、油を含ませた布切れの中心部のような体臭だった）。彼は７月の最初の日に、【脱税者が匿名で納める】「罪滅ぼしの献金」11 シリングを、週単位で（フン、これら完璧なるジプシーめ！）【家賃として】払った（何ということだ！）。というのも、仕事を娯楽へと替え、文法から逸脱したアイルランド語を文法から逸脱したドイツ語に置き換え、アダムの堕罪に関わるルポルタージュを作成し、大陸の定期刊行物である「フランクフルター・ツァイティング」に載せたからである。そしてその雑誌に、リン・オブライエン【ブライアン・オリンは歌に出てくるウールのズボン職人】の作った、メルトン地のラムウールのコートの件で、ある人物が自分に迷惑を及ぼしたと記し、更に、自分は同製品を送り返してもらうか、あるいは被害額が、実に驚くべきことに、500 ポンドにも上るかのどちらかになろう、と書いたのであった。さて、率直なる人々よ、ガラスの心臓を受け入れるためにも、貴君らは通りや野外舞台で繰り広げられている虐殺に関わるショーが、ノロジカが山の頂きであざ笑ったりするような、アイルランド人の受けた、ただの一連の脅迫と虐待に過ぎないことを知っておかなければならない。名前がデイヴィー【ハンフリー・デイヴィーは 19 世紀のイギリスの科学者、物理学者】であれ、ティトゥス【ローマ皇帝】であれ、来るのを求められていないハンフリーの訪問客であり、雄牛が騒ぎ立てている山々のことをムクドリのように知っている、ずば抜けて粗野で野暮ったいこの男は、中西部から強盗団のような足取りでやって来て、クラウディー・グリーンという名のダンスを長時間した後、切り株のようなボックビールのマグを大きな音を立てて、何とかというものの上に置き、注意を引きつけるために、この館の主人の鍵穴を通して、クウェーカー教徒としての言葉を（オイ、お前！　呪われちまえ！）吹き込んだあと、門の外では彼の衣服を切り裂くもの【大風】が耳をつんざくような最初の大声を出している中、その門を通してこうほざいたのだ。まずお前が毛むくじゃらであったら、ふさふさしたカツラをかぶったお前の頭をかち割ってやるだろう、と。また次に、お前が人間のカスであったら、自在スパナでナッツを割るのと同じやり方で、お前のひょろ長い子ガモのような頭に、ゲージをくだけるほどに振り下ろしてやる、と。そして最後に、もしお前が騒ぎ立てたら、俺の（あるいは皇帝の、あるいは他の人間の）飲み水よりも濃いものを飲ませてやるだろうし、またおまけにお前の忌々しい継兄弟としてのその血をバケツに捨ててしまうだろう、と。更に勢いをつけようと更なるメチルアルコールを要求し、お前の爺さんたちは皆鼻持ちならない、と言い、今は 10 時を過ぎただけじゃないか、と言い、そしてこのお前のいる小屋はアイルランドの水を売るために開いている酒場である、と言い、そしてそれから彼は、簡単にはめげずに、怒りのこもった砲弾を雨霰と浴びせかけ、11 時半から午後の２時まで猛烈な勢いでこの悪態を続け、この館にとって軽食堂となる時間さえ持つことを許さず、神の息子よ、現れて、このユダヤ人の乞食を処刑してくれ、アーメン、と言い、様々に混じり合った例えを使って彼を風雨に晒したのだ。イアウィッカーは、(71) 飢餓時代に建てられた壁の後ろにある温室の隅でずっと耐え忍び、感情を抑えながら顔を青くし、魔法瓶と長い柄の扇を傍らに置き、アザラシのような剛毛の頬髭を象の牙のように逆立てはいたが、長い間苦しみながらも、あの模範的な精神と「ディオニュシオスの耳」【シシリー島、シラクサの人工の洞穴。シラクサの僭主ディオニュシオスがこの洞穴に囚人たちを閉じ込め、彼らの秘事や悲鳴を聞いて楽しんだという伝説がある】のようなあの受容力の高い模範的な耳をもっていたので、ワイルド・ギースの逃亡を嘆きつつ、自分につけられた侮辱的な名称がいつまでもファイルに記録されるように、【下記のような】長いリスト（現在一部失なわれている恐れあり）に纏めた（エッカーマン【ドイツの詩人、作家。『ゲーテとの対話』の作者】等との対話集として、更には困窮しながらも自由で、神々しく、きれいな芝生の上に住む女性たちとの対話集として知られている選集の中から、ジョゼフィ-ヌ・ブルースターはこれを、淑女の楽しみのために、またユーモア小話としてミルタウンなどで読まれるように編集した）。**一夜だけの性交渉のお相手、密告者、爺のホモ、卑怯なホイッグ党員、ケツまで腐っている、干からびた山羊、裏社会の美男子、そうよ、あたいたち彼のバナナをもらったの、ヨークのセックス魔、へんてこな顔、バゴット通りのカーブしているところで奴はぶつかってきた、へつらっておべんちゃら、立ち入り自由の貧困者収容所、カインの存在を可能にした者**【アダムのこと】、**アイルランドの驚異の８不思議の最後のもの、私の値段を買いたたけ、神よ、この男を汚したまえ、満月様顔貌の殺人者、白髪の毛むくじゃらのたぶらかし屋、真夜中に急**

に照りつける太陽、あの聖書を片付けちまえ、ヘブライのヒトコブラクダのパブ所在指示器、脚の不自由な専制君主チムール、酔った土塊、ティータイムの前の酔っ払い、お前の茶番劇的ジョークを読み解いてみろ、耳障りな男、我々の狡猾さを埋めるための質のいい埋木をぶっ壊したと思っている者、女性にとっての恥知らず、訳の分からないおしゃべりをするダブリン湾に住む口、奴の父親は見下げ果てた野郎で、母親は奴を人狼の下に置いた、火炙り相当の大根役者であり、禍をもたらす者、ペテン師、質素なプロテスタント教徒に値しない者、土地に縛られた小作人、水だけが食糧の状態にようこそ、緑リボン会【19 世紀初頭のカトリック教徒の秘密結社。小作人放逐反対運動を起こす】会員と署名、女陰好きの小貴族、すべてをこの街のアーサー【アーサー・ギネス】のために、警察の手から売春婦を立ち去らせた、革の水着を着たドナルド【歌名のもじり】、貧民の第１人者兼疫病神、酒樽の後ろでこの男にキスをするためのオライリーの作った娯楽品、熱の入ったゴグとマゴグ【聖書の中のセイタンに騙され、神に挑む地上の国民を表す】、なよなよした兵士、痛風のギベリン党員【中世イタリアで教皇派に対抗してドイツ皇帝を擁護した貴族派】、下痢気味のルター【ルターは便秘に悩んでいたと言われている】、雄鶏の卵から孵った者【伝説上の怪物コカトリス】、計画のぶち壊し屋、拘束的結婚生活以前に幸運を得た男【婚前性交渉】、私夫のあなたと離婚するわ、6.5 ペンスの価値、地獄にいるヘレナのところに行け、さもなければコニーたち【どちらも売春婦？】のところへ来い、奴の花嫁をあえがせるまだら馬、バークの酒場から追い払われた者、娼夫である奴は俺の縁者では全くない、野蛮人、特異な人間【ユダヤ人】、勿体ぶった不平屋の雑働き、12 ヶ月間で出来上がった貴族、狼男、教会の下働きの祭式係が、奴がいかれていることを暴露する曲を即興で歌っている、クロンターフに密着している雷と泥炭、試用販売用に送られてきて、売れ残っているブーツ、主の神聖なる土地【エデンの園】における足手まとい、がつがつ食うアイルランド人、婆さん娼婦のゲロ、トーマス・ファーロング【『アイルランドの疫病』を著した 19 世紀の詩人】のペットが原因の疫病、ちょろまかし屋の大公、決勝点の標識柱を通った時ビリ【競馬に関すること】、ホモの相手がいなくなっても、ケネリーはお前には言わないだろう、(72)【クリケットの】後衛の位置にすばしこく走る、給与着服者、アニーの部屋にいるお魚君、オールアウト【クリケット用語、11 人の打者が全員プレーし、10 人がアウトとなってイニングが終了すること】、ゴシップ屋のハサミムシ、ロンバード通りの詐欺師、オスマントルコの崇高なるポーター飲み、ベルギー王にとっての呪い、ロシア国民のツァーにとっての爆弾、役に立つ気まぐれ屋、そして顔色の悪さではナンバーワンの男、コステッロ城【コステッロは 12、3 世紀アイルランド東部の男爵一族。また「コステッロ城」は『アイルランドメロディー全集』に収められた曲名。この場合は売春宿名？】に対して奴がやったこと、羽毛と捕縛縄とともに就寝、女たらしのホラス【・ウォルポール、18 世紀のイギリスの作家】の本を誰が売ったのかは知れ渡っている、フィンガルの息子たちは奴に接近禁止、堕落しつつ支配されている、妻と 40 人の女たちを望んでいる、品評会を奴にやらせておけ、ひっくり返って真っ逆さまに川の中にバシャーン、ポチャンと音を立てる奴の排泄物、廃人となった小物の商売人、奴は――豊かな生活を送るビーバーブルック【イギリスの新聞経営者】、「ワ」はワイン売りの居酒屋店主の「ワ」だった、レイプをまき散らす者、極悪非道なるアルメニア人、病に冒され腹を上にした魚、男色者・獣姦者、―が所有している、普通のアイルランド人気質の特徴を欠いた情夫、あくどいペテン師、怒鳴り散らし屋、裏ビジネスに手を染めている者、汚物、ずる賢いシュガー・ダディー、真っ先に足を急に現して生まれてきた者、ウールワース社の最悪の客、アジア的男根の哲学者、罪深い豚の私生児、酒樽の中で断食、ベッドの中でも酒、背脂氏【背中のこぶのこと？】、警察に勾留、酒宴における雄弁家、退けられたる者。しかし法外なことではあるが、侵すことの出来ない個人の自由を尊重して、彼はこうして座っているだけで、一言も言葉を挟むことなく、それには応じなかった。とはいえ、これは、受話器に手を伸ばし、キマージ外線 17・67【電話交換所の電話番号】に電話するために入った電話ボックスの中で、消極的な抵抗として、そこの至るところにキスをするのと同じくらいの難易度ではあったが。彼がそうしていたのも、この原理主義者がショックを受けながらもついに言葉を発せられるようになって、自分の傷ついた感情について説明したように、この時社会党に対してドミニコ会会員がもつ様な使命感が彼の心に起ったからであり、また聖なるロザリオの祈りとして知られているローマカトリックへの信奉が自分を将来改善し、モード・ゴンのような人物にするであろうと思ったからである。かなり不快という以上の感情を引き起こすこの雄牛は、話をやめる前、彼の癪の種への最終的な嘲りとして、自分には罪がないという自分の言葉の支えの下に、この打者めがけて、どれも同じ大きさの滑らかな石を、酔っていくつか

投げつけたのであった。しかし一斉に投石した後は、自分の恐ろしい意図を実際に行動に移した場合に起るかもしれない事の重大性を、半無意識層を通して認識し、その怒号を変え、山積みになった小川の小石全体をピンポン球のように打ち出すことを控え、そして少しばかり酔いが醒めると、荘重で古からあるダブリンの悪魔の館の周りを行ったり来たりし、この相手をこき下ろす、粘液質の、おぞましい革新家は（呪われよ、呪われよ、呪うべきハリエニシダよ、俺は奴らを皆泡のように吹き散らしてやる！）、(73) この未開の奥地から出て来た田舎者は、ぶっきらぼうに言葉を発し、議員官職辞退条例【議会議員は自治体や軍隊の役職に就かないとするイギリスの長期議会の決議】により、遺体解剖台に乗っているアイルランドを彼【チャールズ・ギャヴァン・ダフィー】は去ったのだと言いながら、この古遺物的舞台を去ろうとし、イアウィッカー、あるいは少しばかり修正した言い方を使うならミスター・イアウィッカー、あるいは世間が使う女々しい呼び名を使うならミス・イアウィッカーに対し、クラムリン【ダブリンに１地区】の栄誉のために、お前のみっともない老いた魚神を連れて、ここからウォータールーの戦場へとでで出ていくように言い、神はお前を呪っているのだ、ポッツ・フラクチャー【腓骨下部の骨折のこと】がケティル・フラットノーズ【９世紀のヘブライ人の族長】に対してしたように、誰でもない者【オデュッセウスのこと】がポリュフェモス【ギリシャ神話中の一眼巨人】に対してしたように、俺はきっとお前の脳天をかち割って、目をグラグラさせてやる、そしてお前の上に岩を乗っけてやる【埋葬すること】、もし２分と 30 秒の間時計が時を打っている間にそうしなくても、俺がキャキャキャンベル【クリケットの選手】だとしたら、お前に対して何もしないなんてことは絶対にない、キャンベル以外の奴だとしても、お前に対してキャンベルがするだけのことはする、その後は、鉄槌で打ち壊し、ぶっ壊し、裂き、殴りつけてやる、マルブルック【レオンカヴァレッロの喜歌劇『マルブルック』中の登場人物】の怒りもこんなものだ、と言い、その後、その威厳ある声を少しも変えることなく、フーガ風の進句【ミサのある部分に飾りとして入れた詩句あるいは曲】の出だしの英雄詩風の２行連句作品番号 1132 を次のようにロずさんだ。**この度の一時休止に追い込むための我が策は、失敗に終わりし運命にあり。**その策は別れの挨拶として親指を噛むというものであった【イタリアでは侮辱の表現】。そして弾薬帯を肩にかけ、泥水地や干拓地に滴【汗？】を垂らしながら、朝に兄弟愛が高まることを深く祈りつつ、ジャック・ハブル【クリケットの選手】のように前かがみになり、滑って転びながら、千鳥足なら着くのに約 1000 年から 1100 年かかる、月に照らされた峡谷の小川に面したところにある、聾唖者のための施設の方角へと独りで悦に入りながら戻っていった（でも何故なのか、ヒーリー！）。さようなら！

そしてこのように、弱い者いじめの達人であるこの雄牛の、リシュリュー的退出【ラ・ロシェルというフランスの都市を、宗教戦争でリシュリューは包囲した】をもって、我々の大要塞が包囲された話の最後の場面は終りを告げた。もし老いた援助者たる賢人が我々に目配せし、バー・ル・ドゥク【第１次世界大戦中包囲されたフランスの街】やドグ・アン・ドラやベルヘン・オプ・ゾーム【歴史上度々包囲されたオランダの都市】がもっているような、その重みを知らせてくれたならば、この包囲のことを我々は心に呼び起こしたく思うであろう。

しかし彼はオックスマンズタウンの荒れ地のそばの多くの家のドアに、別れの挨拶をしていったのだ。というのも、黙した、小さな雲のような寝わらの、埋葬空間を有する彼の石塚があり、そしてホース岬やクーロックや何とエニスケリーにおいてさえ、丘の上や谷あいや石畳の道で、人々はそこに刻まれた文字に目を通しているからだ。この文字の内容は、人間社会の進化の線上にはない考えではあるが、あらゆる死者から一部の生者までにとっての、岩石に書かれた聖書となっている。１つの石の幾多のかけらである、いわゆるオリバーの子羊たち【クロムウェルの兵士たちのこと】が、合わさって彼のもとに１つになるであろう。様々な雲が集まり１つとなった積雲のように、彼はその日彼らの導き手であり英雄たる騎士となるであろう。栄誉に包まれたアザヴァ・アーサー(74)（フィンのようなところがある、以前のフィンのようなところがある）という早業の槍の使い手はさておき、彼【ここの「彼」から、「彼」はフィン・マックールである HCE を表すように思える】は大地の眠りから目を覚まし、羽飾りをつけた高貴な支配者となろう。「アア、アイルランドの復活」（消えてしまった先導者たちよ、生きよ！　英雄たちよ、よみがえれ！）という名の、野バラの咲く谷間において。そして丘陵や峡谷の一面に、この狼としての支配者たる領主（我々を護りたまえ！）の力強い角笛が、鳴り響くであろう、国中に木霊すであろう。

というのも、その時彼の神がアプロホーム【アブラハムのもじり】を求め、彼に、アプロホームよ！　と呼びかけるからだ。そして彼は、私なら

ここにいます、と答える。目配せをすることもされることもなく。そして更に、あなたは、私が悪魔に魂を預けて死んだとお思いだったのですか、と言う。アア、トロイよ、お前の緑の森林が枯れていた時、沈黙がお前の祝宴の広間に存在していた。しかし我らのコンスタンチノープルの族長が、ブーツを履きプルオーバーを身につける時、この騎士の耳には多くの歓喜の声が響くであろう。

肝臓は弱っているのだろうか。少しばかり飲んだくれの肝臓だ！　彼の脳は冷えたお粥。皮膚は湿って嫌な感じ。心臓はものうげで。血流は這うようである。吐息はただただ不活発だ。手足はきわめて痛々しく、指は存在していないかのよう、荒れた手のひら、しもやけの末端、つるつるの足の裏。【しかし死んでいるわけではなく】ハンフリーはまどろんでいる。彼にとって言葉はラスファーナムに落ちる雨滴のように重みがない。それを我々は好んでいる。雨を。雨滴は落ちる。我々が寝ている時に。しかし我々が眠るまで待ってくれ。彼は排水となっているだけだ。停止しているだけなのだ。

（注）

『フィネガンズ・ウェイク』の原典は、James Joyce, *Finnegans Wake* (New York: Viking Press, 1947)を使用した。本文中の（　）内の数字は、*Finnegans Wake* の原典のページを表す。【　】内の日本語は、該当個所の内容を筆者なりに解説したものである。(　) 内の日本語は、原典の（　）内を訳したものである。太文字の箇所は、書名と曲名を除いた原典のイタリック体の箇所である。参考文献としては、以下の書を使用した。

参考文献

1) Anderson, John P. *Joyce's* Finnegans Wake*: The Curse of Kabbalah* vol. 1. Boca Raton: Univers A.Lublishers, 2013.

2) Campbell, Joseph, and Henry Morton Robinson. *A Skeleton Key to* Finnegans Wake. rpt. New York: Viking Press, 1944.

3) Glasheen, Adaline. *A Third Census of* Finnegans Wake. Evanston: Northwestern University Press, 1963.

4) McHugh, Roland. *Annotations to* Finnegans Wake. Revised ed. Baltimore and London: Johns Hopkins University Press, 1991.

5) Mink, Louis O. *A* Finnegans Wake *Gazetteer*. Bloomingtn and London: Indiana University Press, 1978.

6) Rose, Danis, and John O'Hanlon. *Understanding* Finnegans Wake*: A Guide to the Narrative of James Joyce's Masterpiece*. New York: Garland Publishing, 1982.

7) Slepon, Raphael, ed. *Fleet Search Engine* in *The* Finnegans Wake *Extensible Elucidation Treasury (FWEET)*, Website.

8) *Glosses of* Finnegans Wake in *The* Finnegans Wake *Extensible Elucidation Treasury (FWEET)*, Website.

9) 宮田恭子訳、『抄訳、フィネガンズ・ウェイク』集英社、2004年

10) 柳瀬尚紀訳、『フィネガンズ・ウェイク』I、II、III、IV、河出書房新社、1991年

ジェイムズ・ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』第１部第３章の概要（２）(64.30～74.19)

大島由紀夫

(東京海洋大学名誉教授)

要旨：　ジェイムズ・ジョイス著『フィネガンズ・ウェイク』の第１部第３章 64 ページの 30 行目から 74 ページの 19 行目までを訳出した。逐語的に訳した箇所もあるが、内容をくみとりながらその主意を表した箇所もあり、「概要」といった題名にした。この第３章の訳出部分では、本筋から少し離れた、あるパトロンと愛人についての逸話、ALP が HCE に書いた手紙、HCE を誘惑した 2 人の女子、ALP の HCE に対する迫り方、ある変人の HCE に対するハラスメント、などがモチーフとして扱われている。

キーワード:　『フィネガンズ・ウェイク』、　第１部第３章、概要